

1 実践内容

三郷北小学校では「かかわろう つながろう とともに 生きよう」というスローガンをもとに、様々な個性・特性をもつ児童がそれぞれに力を付けつつ、周りの児童との関わりを大切にして社会性も育み、共に生きる教育を進めている。



(1) 組織・体制づくり

個別の支援計画をもとに学級担任と特別支援学級担任が相談し、できる限り学級の中で取り組める教材の工夫をしている。この実践で求められることは、保護者、児童の願いを大切にして学校・保護者が同じ方向を向いて共通に理解し、信頼関係を築くことである。奈良県特別支援巡回アドバイザーに訪問していただき、週に一度、特別支援担当者会議を開いている。この会議によって、教師の不安を減らし、自信をもって教育を進めることができています。

(2) 学校・学級経営で大切にしたいこと

私は、どのようにすれば特性のある児童と周りの児童が深く関わり合うことができるのかを常日頃考えている。そのことが、いずれ互いのつながりを深め、支え合えるなかま作りに通じると考えるからである。その児童だけでなく、周りの児童を育てることも大切だと感じる。互いを理解し、しんどい時にしんどいと言えたり、しんどいと言えない児童に寄り添える児童がいたりすることが安心して学校生活を送る母体となる。周りの児童がその児童の学習や生活の様子を知っていくことが共に生きることにつながる。

(3) Aと関わり合う中で互いに育ってきたこと

4月当初、特別支援学級在籍児童のAが教室のベランダに出ていたり、学習をしていなくても学級児童の大半は「Aさんやから」という理由で何も注意をせず、当たりさわりなく接していたので、Aと関わり合うのは教師が多かった。そこで、私は「優しく関わるのは悪くないが、危険があったり、やらなければならないことがあるときはもっと励ましたり、声をかけたりするべきや。もっとなかまのこと考えていこう。」と話をした。私は同じなかまとして、同じ目線で関わってほしいと感じていた。そのため、外に遊びに行く時や、移動する時間、グループ学習等では、Aに対して教師がずっと直接支援するのではなく、周りの児童と関わらせて間接的に支援する場面も取り入れた。数か月が過ぎた今では、周りの児童が様々なことでAに話しかけたり、「先生、Aさんイライラしてまた蛇口



で水出したから拭いといたで。」と私に報告する児童がいたりしている。また、Aは自分のやりたくないことがあると、だれかに「～やろう。」と言われても、嫌がって相手を押すことがある。最初は「Aさん押してくる。」と私に相談する児童がいたが、今では、「いらんねんな。じゃ、後でしょうか。」「いまやりたいこと終わったらやろうか。」等、Aがいろいろなことを取り組みやすい話し方や接し方になってきた。Aも最初は友だちの話の聞かなかつたり、こだわりが強く、次の学習に進めなかつたりしていたが、徐々に自分なりに納得して切り替えがうまくなってきた。関われば関わるほどお互いが育つので、これからの児童たちのつながりが楽しみである。



2 成果及び課題

インクルーシブ教育を進める中で教師間、児童同士のつながりが深まり、学習面、生活面で良い面がたくさん見受けられている。学級担任・特別支援学級担任が教室にすることで、Aだけでなく学級にいる支援を必要とする児童のサポートが効果的に出来ているのもその一つである。

しかし、課題もある。その一つが特性ある児童に対する専門的知識や環境の不足である。教職員研修も行われているが、まだまだ学ばなければならないことが多い。目まぐるしく移り変わる教育の中で、教師一人一人が立ち止まって振り返りながら進んでいくことが大切だと感じる。他にも人員確保の厳しさや体制作りなどの課題はあるが、教師はまず一人の人間として、その児童に寄り添ってつながっていくことが大切だと感じる。それが、周りの児童とその児童とのつながりにもなる。その児童と周りの児童が、お互いに存在を認め、個性・特性を理解していき、支え合えるなかま作りが、その児童の「地域で育ち、地域で生きる」土台になると感じている。

3 その他参考になる事項

三郷町立三郷北小学校ホームページ <http://www1.kcn.ne.jp/~sankita1/>

1 実践内容

今日の学校現場においては、団塊世代の退職期を迎え、新規教員が大量に採用される時期となっている。このような状況下、ミドルリーダーとしての中堅教員の役割が非常に重要になってきている。世代構成に偏りが見られる中、ミドルリーダーは、学校の教育目標や管理職のビジョンを理解した上で、その具現化に向け提案したり、教員間の意見を調整したりしながら、教員それぞれがもつ情報や知恵、意見を集約して、学校運営に円滑に反映させていくことが大切である。さらに、日常的なコミュニケーションを通して、経験が豊かな教員と少ない教員とのパイプ役を果たしながら、ミドルリーダーが担っている役割を自覚し、学校運営に寄与できる取組を進めている。そして、パノラマ的に学校運営を見渡し、学校長の経営ビジョンをより具現化し、教頭を補佐していく取組を進めている。



また、各取組が円滑に進むように担当分掌を決め、チームとしての取組の推進を促した。

(1) 学力向上への取組

- ① 町教育委員会の学力向上委員会方針を受けて、学力向上プロジェクトを組織した。その中で、本校の課題をとらえながら考察を行い、解決に迫る具体案を管理職及び教員に提案した。
- ② 課題の把握にあたり、県学力テスト（4年生）、全国学力テスト（6年生）の分析を行い、校内職員研修において課題を共通理解し、具体的改善に向けての提案を行った。
- ③ 課題解決を目指す上で重要であるとしてとらえた家庭学習の習慣を定着させるため、「家庭学習の手引き」を作成し、各家庭に配布した。
- ④ 朝の時間（業前時間）の充実を図る上で、これまでの朝の読書の時間を10分間繰り上げて開始することとし、従来の朝の読書時間を「きららタイム」として、課題解決に向けた一方策とした。

	月		火		水		木	
	8:10~20	8:20~30	8:10~20	8:20~30	8:10~20	8:20~30	8:10~20	8:20~30
第1・3・5	教師 職朝/ 体育館	児童 体育館へ 移動	教師 職朝/ 見回り	児童 読書	教師 職朝/ 見回り	児童 読書	教師 職朝/ 見回り	児童 着替え
	全校朝の会		きららタイム (発声)		きららタイム (学習・国語)		きららタイム (体力作り)	
担当分掌	教務部・生徒指導部 放送委員会		学力向上PT		学力向上PT		保健体育部	
第2・4	職朝/ 活動場所	移動	職朝/ 見回り	読書	職朝/ 見回り	読書	職朝/ 見回り	着替え
	全校活動		きららタイム (発声)		きららタイム (学習・国語)		きららタイム (体力作り)	
担当分掌	特別活動部		学力向上PT		学力向上PT		保健体育部	

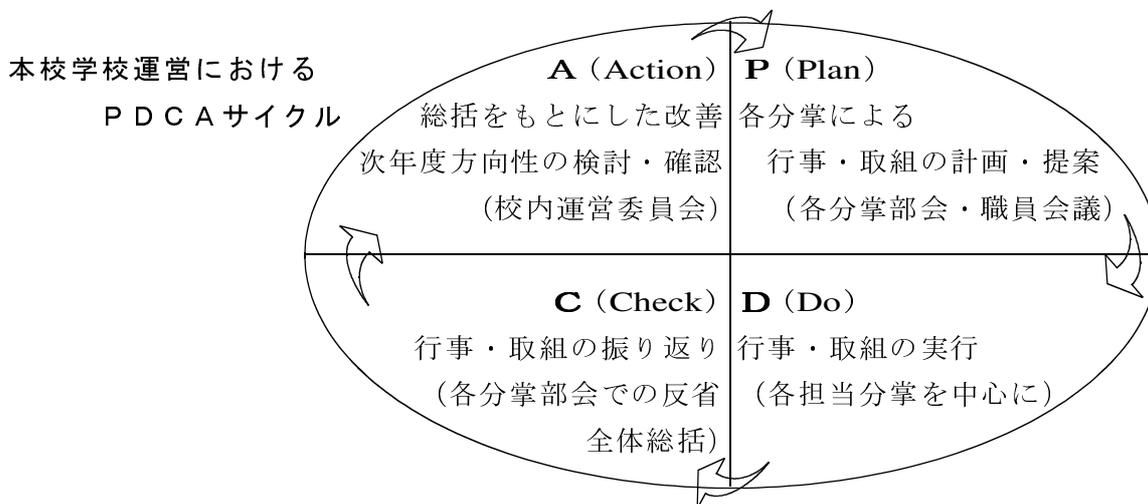
- ⑤ 学習規律や学習指導についても検討を行い、本校版の「基礎学力を高めるために大切にしたいこと」を作成し、全教員による共通理解を図った。

(2) 小中連携（小中一貫）教育に向けた取組

- ① 町教育委員会による研究指定を受け、小中連携に関わる協議を行い、中学校教員と共に情報交換、意見交流などを通し、より効率的な連携の在り方を探った。
- ② 新たに連携のための行事を作るのではなく、小中ともに今ある行事を効果的に活用する方策を探った。「無理のない」相互連携を進めることを念頭においた。

(3) 評価に関わる総括の分析と結果を活用した学校運営に向けた取組

- ① 各総括項目について全教員が学校内評価を行い、数値化しながら明確化を図った。
- ② 反省や課題を記入するだけでなく、それに対する改善案を記入することにした。
- ③ 年度末に反省等を一括して記入する方式から、年間を通して日常的に記入できる方式に改めた。
- ④ 管理職、各主任が参加する校内運営委員会をもち、教員から出された課題や改善案をもとに来年度に向けての取組を協議した。PDCAのサイクル化を重要視して、取組を進めた。



2 成果及び課題

学力向上に関わって、学力向上委員会の方針や学校の教育目標を踏まえた提案を行うことで教員の学力向上への課題意識を高めることができた。また、教員からの様々なアイデアを受けとめることができ、アイデアや意見を次の提案に生かしていくという一つのサイクルができつつある。

小中連携（小中一貫）教育については、中学校における指導実態を知ることによって、教員が学習指導や生徒指導面において小中学校9年間を見据えた指導を強く意識するようになった。児童生徒だけでなく、教員間のスムーズな接続を目指した取組を今後も検討していきたい。

総括方法を改善することで、教員の学校運営に対する積極的な参画を促すことができ、多くのアイデアを学校運営の改善のために生かしていくパターンが広がったと捉えている。さらに、学校運営に自らのアイデアが生かされることで、さらなる参画意識が促されている状況も見られる。

今後、ミドルリーダーとしての責務でもある教員間の調整を進めながら、ベテラン教員がもつ多くの経験やすばらしい知恵を、若手教員に伝承していく取組を一層進めていきたいと考えている。

1 実践内容

平城西中学校区には、右京小学校と神功小学校の2つの小学校があり、施設一体型ではない連携型の小中一貫教育の取組を進めてきた。施設は離れているが、小中合同授業や小小合同授業など様々な取組を行っている。

平成26年度に4年計画で文部科学省より英語教育強化地域拠点事業の指定を受け、ここ数年で本校区の英語教育は劇的な変化を遂げてきている。「互いを認め合い、生き生きとコミュニケーションする子ども」を目指して、小学1年生から中学3年生まで9年間の系統立った教育課程と指導、また中学校における指導内容の高度化を図ることを小中共通の主な研究として進めている。



(1) 平成26年度

① 英語担当者部会発足

- ・拠点事業の中心組織として毎月定期開催
- ・奈良市立学校共有フォルダの校務パソコンでの使用で会議時間の短縮化

② 小学1年生～中学3年生まで9年間を見据えたCan-Doリスト素案を作成

- ・「目指す子ども像」(ゴール)を共通認識
- ・Can-Doリストを意識した授業デザイン

右京小・神功小の英語担当者と3名で毎月英語部会を開催し、9年間を見据えたCan-Doリスト素案を協働して作成した。Can-Doリストとは「～ができる」という形でゴールを示したものであり、それぞれの段階に応じた指導を系統立てて行うことを目指している。

(2) 平成27年度

① 小学校において1・2年生で活動型、3～6年生で教科型の英語教育を開始

- ・「聞く」「話す」力育成に加え、「読む」「書く」に慣れ親しむための指導追加
- ・適切な評価方法の検討と教員間の評価基準統一のための合同研修を実施

② 小学校担任主導の授業へ転換

- ・地域人材や中学校英語教員に代わり、学級担任が主導する英語教育への転換

③ 中学校英語授業における教員及び生徒の英語使用率アップ

- ・授業における教員の英語使用率 50%程度→80%程度
- ・生徒が英語を使って相互的なやりとりをする活動の工夫

④ Can-Doリスト素案を基にした授業展開の試行

小学校において1・2年生で活動型授業、3～6年生で教科型の英語授業を開始し、学級担任が主導する英語教育への転換・推進を図った。そのために小学校学級担任の英語指導力強化が喫緊の課題となり、小学校の拠点校事業担当者とともに授業に入り込み、授業者に必要なサポートを行った。また、各校の英語担当者を増員

し、課題の共有や指導案の作成等授業の直接的なサポートと、教員を生徒に見立てて模擬授業をし、授業で即活用できるアクティビティを紹介するなど、授業者への研修の企画・実施を行った。

(3) 平成28年度

① 小学校でモジュール授業（Eタイム）の開始

② 児童・生徒版C a n - D oリスト使用開始

担当者部会を定期的を開催し、C a n - D oリストが実態に即しているか検証・見直しを進めている。また、児童生徒用のC a n - D oリストも作成し、予め子どもたちに提示することで、見通しをもって学習させることができる。さらに、学期末にリストを使って学習者自らが学習を振り返り、具体的に達成度を確認し、次の目標につなげることができる。また、中学校



英語の学習内容から小学校で早期導入できる内容を検討し、その分中学校で高度化できる内容があるのか研究を進めている。講義中心であった授業から、コミュニケーション活動に重点を置き、ペアワーク・グループワークを設定し、相互にやり取りをする力の育成に向け授業改善を図っている。

2 成果及び課題

成果としては、まず第1に小中の垣根を越えていつでも相談しやすい職員の関係づくりができたことである。第2に、教員の意識の改革ができたことである。事業初年度の平成26年度から英語担当者が率先して研修に参加し、伝達することで、生徒の学習環境の変化だけでなく、英語教育に携わる教員一人一人の姿勢も変化し、校区全体の意識改革につながってきたのではないかと感じている。中学校では今まで「教科書を教える」ことにとらわれがちであったが、C a n - D oリストを意識した授業をデザインすることで「教科書で教える」ことにつながった。

この取組を通して、英語は必要であると肯定的に捉え、英検やコンテストに挑戦したり、生き生きと英語でのコミュニケーションを楽しむ子どもが増えた。適切なパフォーマンス課題の設定や評価等、取り組むべき課題は山積しているが、今後も小中で連携しながら英語教育の改善を続けていきたい。

3 その他参考となる事項

本校区の英語教育強化地域拠点事業中間報告冊子

分野番号 5 中学校 特別支援教育の部

特別支援学級の入級生に対する入学時の対応と授業実践と通常学級における特別な教育的ニーズをもつ生徒・保護者への対応について

大和郡山市立郡山南中学校 教諭 増田 薫

1 実践内容

私は、これまで教員生活の半分以上を障害児教育・特別支援教育に携わってきた。平成23年から3年間、交流人事として奈良県立西和養護学校で勤務の機会を得、地域に戻ってきた。その中で、中学校の教職員や保護者の方への特別支援教育への理解や認識を広め、実践につなげていきたいと考えていた。



本校では3年前から7月中に校区の小学校の保護者に対して、本校の特別支援学級であるなかよし学級の見学会・説明会を行っている。保護者、時には児童本人も一緒に、本校全体の見学、なかよし学級での学習の見学、授業の取り出しや入り込みへの対応の仕方や、中学校卒業後の進路についても説明をしている。3学期には、本校の特別支援学級に入級が決定した児童の保護者との個別懇談、小学校の担任との懇談を行い、入り込みが必要な教科の有無、取り出し授業を行うことにおいては、学年相当の基本の学習を行うか、下学年相当の本人に合わせた学習を行うかを本人・保護者の同意を基に決定している。それを基に教務主任とともに教育課程を作成している。

生活の時間（自立活動を中心とした合科学習）では、作品の制作などで手指の巧緻性を高めるとともに、好ましい人間関係を構築できるように作業学習を中心に取り組んでいる。

絵を描いたり、作品を作ることにに関して消極的な生徒が多いため、スモールステップで自分のペースで制作していけるように設定している。この2年間で、ペーパークイリングやゼンタングルなど各生徒に合わせた活動で作品を作成した。ゼンタングルとは「かんたんなパターンを繰り返し描くだけで、誰でも美しいアートを楽しむことができるメソッドで、年齢やアートの知識、経験はまったく必要ありません。呼吸を整え気持ちをリラックスさせ、心のままに描くうちにイメージができあがっていく行程を楽しむものです。」と説明しており、自分の好きな図柄を選び、自分のペースで仕上げる事ができた。ペーパークイリングでは、身近にある材料を使って自分の好きな色を選び、作品に仕上げた。合同作品として校内の文化祭や市の作品展に出品するなど、生徒の頑張りを認めてもらえる場面作りを心掛けている。

もう一つ、感謝される経験、責任をもって仕事をする経験を積ませるため、各クラスへの配布プリントの枚数を数えるなどの仕事を校内の教員から任されるようにしている。この作業は正確に数えること、「できました」の報告をすることや指示が分からない時に教員に尋ねること、完成した仕事を届ける時の話し方など、活動の中に好ましいコミュニケーションを学ぶ大切な機会にもなっている。



「なかよしフォース」(ペーパークイリング作品)

本校でも通常学級在籍生徒の中に、特別な教育的ニーズをもっている生徒、医療機関などで検査を受け知的グレーゾーンや認知の偏り、あるいは発達障害の診断を受けている生徒が多くいる。4月の家庭訪問終了時と7月の三者懇談終了時には、保護者からの申し出や日々の授業や活動の中で感じる特別支援教育の面から気になる生徒の情報を各担任に提出してもらい、全職員で情報共有をする機会を設けている。そこから、特別支援教育巡回アドバイザーの先生に来校いただいて、生徒の支援について助言頂いたり、必要に応じて特別支援教育コーディネーターとして個別に懇談を行っている。その例と



「なかよしゼンタングル」(作品の一部)

として、通常学級の生徒で保護者の低学力への心配が強いことから懇談を行い、検査を受けたいとの保護者の思いを聞き、教育研究所特別支援教育部で検査を受け、保護者・担任とともに教育相談に行き、本人への支援の方法を話し合った事例や、通常学級在籍ではあるが、療育手帳の取得をし高等養護学校への進学も視野に入れている生徒に対して担任と連携をしながら、支援をした事例がある。

2 成果及び課題

就学指導委員会への申請の前に、中学校からの入級を考えている保護者とも見学会・説明会、個人懇談を行うことで、中学校生活や高校進学への漠然とした不安感をもっている保護者には安心感を感じてもらえ、それは生徒の安心感や安定につながる。そして、教職員で入級生の入学前に、その生徒の様子や保護者の願いを共通理解できていることは受け入れる側としても安心である。慌ただしい中ではあるが、入学式の後に交流学級担任・学年主任と本人・保護者と共になかよし学級で顔合わせをして、家庭訪問までの数週間の不安感を取り除けるようにしている。

生活の時間の取組では、人に伝えることを実践することで、生徒は少しずつコミュニケーション力を付けてきた。そして感謝される実感や必要とされる存在であるという実感を感じ、自己有用感をもてる生徒も増えてきた。一方で、今年度からいわゆる「障害者差別解消法」が施行され、学校教育の中でも合理的配慮と基礎的環境整備が求められるようになった。合理的配慮の正しい理解と実践を教職員全体に伝える必要がある。障害児教育から特別支援教育と変わり、特別支援学級に入級していても障害受容ができていない本人・保護者もいる。とくに、その場合には教員が必要であると判断した支援をどのように提示し、理解を得ていくか、個別の教育支援計画に取り入れていくかは、その時々判断になり、管理職・教職員全体の理解と協力が欠かせない。教職員全体で生徒を支えることができるように、自分自身の力量を高めるように研修を重ね、研鑽に励むとともに、学校としての体制づくりにもさらに力を注いで行きたい。

3 その他参考となる事項

ゼンタングル (ペン1本で誰でも描けるパターンアート)

発行所 株式会社ブティック社

1 実践内容

機械研究部では、「地域連携」を重点に、様々な活動を通して、技術指導に関する支援者の輪を広げ、生徒の専門性を更に向上させるとともに、地域住民とのふれあいの中で生徒の情操を育てている。その結果、各種検定や大会で成果をあげ、学校全体の教育活動に活気を与えている。



(1) 専門性の更なる向上

平成20年度より、奈良県職業能力開発協会及びものづくりマイスターにおける機械加工分野の専門家と連携し、地域の専門技術者を機械研究部の活動に招き、旋盤加工におけるより高度な技能を指導していただいている。特に、県内で「からくり独楽」の研究をしている技術者から、精度の高い加工法を伝授してもらい、10分以上回転し続けるコマを製作した。そのコマでプロの技術者も参加する全日本製造業コマ大戦近畿大会（平成26年5月大阪開催）に出場し、出場34チーム（高校3チーム）の中で準優勝（高校チーム最高順位）を果たし、世界大会への切符を獲得した。

全日本製造業世界コマ大戦（平成27年2月横浜開催）では、出場30チーム（高校2チーム）で、世界第4位まで勝ち残り、高校チームの中ではトップの成績を収め、金属加工のプロを相手に大健闘した。この取組はNHKや毎日放送のテレビ番組にも取り上げられ、本校の広報活動や活性化にも貢献した。



(2) 地域貢献・情操の向上

数年前より、「都跡ふれあいまつり」や「田原本町やどかり市」等のイベントに参加している。「田原本町やどかり市」では、機械研究部で製作したシャボン玉発生器で駅前商店街の雰囲気を盛り上げたり、綿菓子製造機やポップコーン製造機等を製作

したりするなど、子どもたちや地域の方々とのふれあいを通して、生徒の情操を育む活動を行っている。その結果、生徒の提案でポップコーンの売上金をいち早く熊本大震災復興基金に寄付し、



そのことが新聞紙面にも大きく取り上げられるなど、社会貢献の面でも教育効果をあげている。また、自治会から依頼された模擬店用大型鉄板の製作や特別支援学校から依頼された三輪車の修理、近隣高等学校の校門の修理等、様々な活動も行っている。日々の技能向上に向けた取組の成果を発揮することで、地域の方々に喜ばれ、つながっていくことが活動の原動力となっている。

(3) 技能検定取得者の育成

機械研究部の技術力向上に伴い、3年前は6名であった技能検定取得者が、現在では部員16名のうち1年生5名を除く11名全員に増えた。それを機械研究部以外の生徒へ拡大するため、検定取得した機械研究部の部員に実技指導の補助をさせるなど、効果的な指導方法を工夫したり、検定合格者の名前を全校生徒に示したりすることで検定に対する意識を向上させ、機械工学科全体（2クラス×3学年）で100名を超える検定取得者を輩出することができた。

そのような中で、平成26年には機械研究部の卒業生がフライス盤作業で企業から技能五輪本選に出場し、平成28年8月には機械研究部ではないが、卒業生が旋盤作業で11月に開催される技能五輪本選出場が決まるなど成果を収めている。

2 成果及び課題

学校内では、機械研究部の生徒が、3年前の6名から現在の16名に増え、専門的スキルが向上すると各種活動に積極的に参加するようになり教育活動も活性化してきた。その結果、工業系学科では、検定取得者が、各クラス3～4名程度であったのが、各クラス20名程度まで増加してきた。商業系学科でも全商一級や日商二級等の上位級の合格者が前年度比13%増の101名と増加した。また、各種技能コンテストに参加したり、各種技能検定に挑戦することで、専門的スキルを一層高め、平成28年度に「奈良県溶接競技会高校生の部」で会長賞、「全国高校生ものづくり大会旋盤の部奈良県予選」で1位を受賞した。技能コンテストでの受賞や検定取得で自信をつかみ、そのスキルを生かして地域の依頼に応えることで、自己有用感を育み、自尊心の向上にもつながっている。

学校外でも、地域の行事に物心両面で参画することで、高い評価をいただいております。平成28年度も多数の参加の依頼を各方面からいただいております。地域の専門家の方々も、次世代を担う技術者育成の観点から、継続して技術指導に取り組みたいとの評価も得ている。さらに、溶接や機械加工に関して、インターシップでお世話になるなど、地域から学校教育に対する協力者も増えてきている。

今後は、企業間連携も視野に入れ、奈良県職業能力開発協会が現在行っている、「ものづくりマイスターの派遣制度」のみならず、さらに本校を支援していただける企業や人材を増やしていく方策を、学校規模で考え、実践していくことが課題であると考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立奈良朱雀高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/ns-hs/club/kikai/index.html>

1 実践内容

本校は、農業系学科と工業系学科を有する専門高校で114年の歴史と伝統をもつ学校であり、長年地域産業の担い手育成に努めてきたが、地域産業の衰退や吉野町の少子高齢化の影響で、地元地域からの入学者が減少傾向にあることが大きな課題である。本校には、将来に対し様々な期待や不安をもつ多様な生徒が少なくなく、これまでの家庭生活や学校生活において、成功体験や達成感を得た経験が少ない生徒や、他者とコミュニケーションを図ることが苦手な生徒も含まれている。このような状況の中、森林科学科の教員として、日々の学習活動を通じて専門教科に対し興味・関心を抱かせると共に、奈良県の地場産業であり、吉野町の主産業である林材業に興味をもたせ、次世代の担い手を育成できるよう努めている。生徒と共に取り組んでいる活動の実践報告及び地域との連携について報告する。



(1) 「よしの調査隊」の結成

平成26年4月に森林科学科2年生2名が選択履修した「課題研究」の授業で”地域の情報発信”をテーマとして設定した。そこで、当該科目指導者の私と生徒2名で地域の魅力を掘り起こすための活動組織を立ち上げ、「よしの調査隊」と命名、森林科学科の生徒が参加する農業クラブ活動の一環としてスタートさせた。活動内容の基本は、吉野地域で木材の加工や利用に関わる方々を生徒自らが取材し、その様子をWebページやSNS、動画配信を活用して町内外の方々に発信し、少しでも多くの方々に地域の魅力を伝えていくことであった。現在配信している動画は総数25本になっている。私はこの活動を通じて、生徒が地域産業の現状やそこに携わる方々の思いを知り、地域の方々とコミュニケーションを図ることで地域理解を深めるとともに、生徒個々の自己啓発につながることを期待した。また、一過性の活動ではなく、多様なメディアを利用しながら継続的に活動し、生徒自らが思考を広げていくという経験を通して、多くの学びが生まれることを意図して指導に当たった。



活動2年目には生徒が4名になり、取材がきっかけで、製箸業者と新たな「文様割箸」を共同開発した。森林科学科の生徒がレーザー加工機を使い、文様を割り箸の表面に彫刻し、吉野特産の杉割り箸の付加価値を高めて全国にアピールしようとした。この活動の輪は、吉野町や広告代理店にも広がり、産官学が協働する「文様割箸」プロジェクトとなった、そして、この付加価値のある割り箸は、地域の活性化につなが

(2) 地域との協働の広がり

活動2年目には生徒が4名になり、取材がきっかけで、製箸業者と新たな「文様割箸」を共同開発した。森林科学科の生徒がレーザー加工機を使い、文様を割り箸の表面に彫刻し、吉野特産の杉割り箸の付加価値を高めて全国にアピールしようとした。この活動の輪は、吉野町や広告代理店にも広がり、産官学が協働する「文様割箸」プロジェクトとなった、そして、この付加価値のある割り箸は、地域の活性化につなが

る取組とデザイン性が評価され、2015グッドデザイン賞を受賞した。また、内閣府が実施した「まち・ひと・しごと創生あなたのまちの地方創生動画」にも動画を応募し、現在3本の動画が公開されている。これらの活動が認められ、地域の魅力を発信する「よしの調査隊」の活動は吉野町公認となり、吉野町が実施した地域メディアプロデューサー養成講座に「よしの調査隊」のメンバーも参加し、地域メディアプロデューサーとして活躍している。



2 成果及び課題

「よしの調査隊」は本年度11名となった。そして、情報発信活動だけでなく、地域イベントで運営ボランティアとして参加するなど、活動をより高次のものへと広げようとしている。今年度は、奈良県南部東部振興課の「ふるさとへの愛着心事業」に協力し、吉野町国栖地域で続く「国栖の里灯り展」で中学生の灯り展をプロデュースした。また、ステージイベントを企画・運営し、地元中学生が活躍する場をコーディネートし、無事に実施することができた。さらに、奈良県が主催する、奈良のPRや魅力向上に寄与した個人または団体を表彰する「あしたのなら表彰」の特別賞を受賞した。現在では、一般のテレビ局や地元ケーブルテレビ、新聞社等から逆に取材の依頼が増え、注目を浴びることで、生徒の中には今まで以上に前向きな姿勢が見られ少しでも地域のために貢献しようとする意識の高まりが感じられる。次年度には、生徒発案の企画「復活・筏プロジェクト」をスタートする予定で地域の方々と事前の準備を進めている。

これからも積極的に活動を継続し、地域とのつながりを広め、少しでも地域に貢献し、生徒により多くの経験を通して、成功体験や達成感を得て自信をもたせるとともに、地域理解やふるさとへの愛着心を高められるよう取り組みたいと考えている。

3 その他参考になる事項

よしの調査隊YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/c/よしの調査隊>

よしの調査隊Facebookページ

<https://www.facebook.com/yoshinotyousatai>



YouTube



Facebook